一八五七年恐慌（二）

三宅義夫

四

さきに、一八五〇年秋の『新ライン新聞—政治経済評論』での「評論」—「五月—十月」において、「もし一八四八年にはじまった工業発展のあたらしい循環が一八四三—四七年のそれと同じ経過を辿るならば、恐慌は一八五二年に勃発するであろう。いつの恐慌にも先行するところの、過剰生産から生じる過度投機が遠からず起らざるをえないという徴候として、イングランド銀行の割引率がここ二年来二パーセントより高くなっていないということを挙げよう」云々と述べていたことを見たが、いま一つの区切りとして、そのあと一八五二年末にいたる期間について見てみよう。

一八五一年には、論文の形でイギリスの恐慌ないし景気変動について述べているものは見当らないが、この当時マルクス、エンゲルス両人の間で交された手紙のなかには——一八五一年のはじめにはマルクスは、経済学研究を「まったくはじめからやり直し」ていることを窺わしめるところの、リカァドの地代論批判や通貨主義批判の手紙を書いているが、そのあとプルードン批判、ケルンでの検挙事件、「トリビュンの件」、等々、の手紙にまじって——、つぎの

ような記述が見出される。[1]（以下の手紙のなかの傍点および「　」内―三宅）。

（1）ちなみに、エンゲルスがロンドンを去ってマンチェスターに移ったのは一八五〇年十一月であったので、往復書簡はこの一八五一年からその数が急増した。往復書簡集が往復書簡集らしくなってくるのは、この一八五一年からである。

まずはじめに出会う記述、――「鉄道投機がまたすばらしくなっている、――一月一日以来株式はほとんど四〇パーセント騰貴した、しかももっとも劣等なものがもっともいちじるしく。前途有望だ！」（一八五一年三月十九日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。ただしこのあと、この「鉄道投機」のその後の成行きについてはなにも書かれていない。ここで「前途有望だ」といっているのは、いうまでもなく、過度投機を恐慌の前段階と考えていたからである。

一八五一年七―八月。「これからの六週間に特別なことが起きなければ、今年の棉花収穫は三百万梱、つまり一、二〇〇百万封度ないし一、三五〇百万封度に達しよう。こんな豊作はいまだかつてなかったことだ。その上取引減退の徴候（Symptome）がある、――東インドは滞貨状態で（ist überladen）、綿製品の輸入停止を叫んでおり、当地の綿糸布市場は棉花価格の動揺によってたえず攪乱されている。市場における崩落（crash）がこのような大収穫と鉢合せしたら、見物だろう」（一八五一年七月三十日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。――「ただいま、商業恐慌へのすこぶる愉快な見透しを立てている君の手紙を受取った」（同七月三十一日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）。「アメリカからの木綿商品取引の報告もよくない。諸市場は滞貨状態であり（sind overstocked）、そしてヤンキー自身も市場の現状にとってあまり多く製造しすぎている」（一八五一年八月〔二日〕付マルクス宛のエンゲルスの手紙。手紙の日付に〔　〕が附されているのは、本稿で底本としている『往復書簡（Briefwechsel）』の編集者モスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン・インスティトゥートによる推定の日付）。

一八五一年九月。「リヴァプールやロンドンではもう破産者が出はじめた。そしてエコノミストは、国内の事業がきわめて健全である、すなわち、過剰資本の大部分は堅実な生産に投下されている、と論証しているにもかかわらず、東インドがふたたび供給過剰（überführt）となっており、東インド取引では古い委託販売・前貸の件[2]が変らざる規則性をもってふたたび拡がっていることを白状せざるをえないでいる。来週、同誌は、いかにすれば委託販売取引を堅実な基礎の上で営みうるかを、われわれに教えてくれるという、――待遠しいことだ。この間、当地の紡績業者や織物業者は莫大に儲けている、――たいていは新年まで契約がすんでおり、地方では一般にすくなくとも晩の八時まで、したがって十二時間から十二時間半の労働が行われている、しばしばそれ以上にも。かれらは封度当り三3/4―四1/2ペンスの棉花から、封度当り七―八ペンスの糸を紡いでいる。紡績費用はこの粗番手の場合わずか封度当り一1/2―二ペンスだから、毎週の生産が一二百万封度の場合（原棉の輸入が六〇〇百万封度の場合）、紡績業者全体の儲けは、粗番手を基準とすると、イングランドで毎週七万五千ポンド、年にして三百七十五万ポンドの純益ということになる。糸の平均番手を六―一二番手の代りに一八―二四番手としても同じことがいえる。そしてよい機械で劣等な棉花を使用しうる人々は、綿糸封度当りに、一ペンス半ではなく二ペンス半を儲けている。すべてこれは四月および五月、つまり棉花価格の下落以来のことであって、比較的もっとも多く綿糸を買っているのはドイツ人である。踊り（Tanz）が勃発すれば――そしてこんな商売はおそらく三月まではつづくまい（dieser trade dauert gewiß nicht länger bis in der März）――、またこれと同時にフランスで茶番がはじまれば、ドイツ人は売れない綿糸を背負い込んでひどい目にあうことだろう、そしてこの国もまた十分に準備されることになろう」（一八五一年九月一日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。「オーストラリアの金糞（Goldscheiße）はおそらく商業恐慌を阻止しないであろう。いずれにせよそれは一時

は、あたらしい、大部分は仮空の市場をつくり出し、また羊毛を騰貴させる、というのは羊群などはなおざりにされるからだ。……最近の破産、なかんづくリヴァプールを襲っている不況にさいして、諸新聞は、それにもかかわらず国内の商業はいまだかつてなかったほど健全であるとさかんに断言しているが、これはすこぶる怪しいものだ。たしかなことは、東インドは滞貨状態で、そこでは数ヵ月以来損をしながら売っている、ということだ。いまこのマンチェスターやその附近で製造されている大量の品物がどこにゆくのか、僕には明らかでない。そこには多くの、非常に多くの投機が行われているにちがいない。というのは、棉花が七月に底値をつき紡績業者たちが原料の手当をしはじめるやいなや、ただちにすべての紡績業者や織物業者は当地の仲立業者たちによって長期にわたる契約を結ばせられたからである、――これらの仲立業者たちは長い間、〔このたび〕かれらが製造業者に注文したように全商品にたいしては注文したことがなかった。東インド商社の間では明らかに古い前貸制度がふたたびさかんに行われている。二三のものはすでに明るみに出ており、その他のものも早晩手ひどい崩壊に見舞われるであろう。当地の製造業者は死物狂いになって働いており、また一八四七年以来当地、とくにマンチェスター周辺五―二〇マイルの地での生産力はすくなくとも三〇パーセントは増加しているから（ランカシャーについていえば、一八四二年には三万馬力、一八四五年には四万馬力であったが、いまはおそらく五万五千ないし六万馬力）、この景気のよい操業が三月か四月までつづきさえすれば、過剰生産となり、君を喜ばすであろう」（一八五一年九月二十三日付マルクス宛のエンゲルスの手紙[3]）。――「君の商業報道は非常に興味あるものだった」（同九月二十三日付エンゲルス宛のマルクスの手紙の追伸）。

（2）この「古い委託販売・前貸の件（die alten Konsignations- und Vorschußgeschichiten）」とは、前の一八四七年恐慌のさいを想起していっているものであろう。エンゲルスはこれについて『資本論』第三部第五篇のなかでつぎのように記して

いる、――「かようにして、前貸をえてインドやシナに大量的に委託販売をする制度が生じたのであるが、この制度はやがて……たんに前貸をえるための委託販売制度に発展したのであり、また必然的に、諸市場の大量的な供給過剰に、そして破局に終らざるをえなかったのである」(Bd. Ⅲ, S. 445)。なお筆者稿「一八四七年恐慌」参照。

(3) これについてエンゲルスはつぎのようなことをマルクスに書送っている。本稿であとしばらく見てゆく記述では、木綿事情が一主要事をなしているので、参考のために掲げておこう。――「つぎの記録は、リヴァプール棉花仲買人組合によって確定されたものであるが、きみはおそらくこういう精確なものはまだ見たことがないだろう。あらかじめ注意しておくと、各年度の棉花収穫高は、つぎの年の〔ここは、その年の、といわなければ以下の説明と合わないであろう―三宅〕九月一日までに諸港で引渡しを終えたものであって、棉花年度は九月一日から九月一日までなのだ。したがって、ここでたとえば一八五一年の収穫として記載されているものは、一八五〇年の夏に成長して一八五〇年の秋に収穫され、一八五〇年九月から一八五一年までに港に運ばれたものを含んでいる、ということになる。いま実っている収穫――これは旱魃と悪天候とのためにもっと減って、約二五〇万〔梱〕になるであろう――は、だから一八五二年の収穫としてしるされるわけだ。

各年の棉花収穫高	アメリカ自体での消費
一八四六年……二、一一〇、五三七梱	記載を欠く
一八四七年……一、七七八、六五一〃	四二七、九六七梱
一八四八年……二、三四七、六三四〃	五三一、七七二〃
一八四九年……二、七二八、五九六〃	五一八、〇三九〃
一八五〇年……二、〇九六、七〇六〃	四八七、七六九〃
一八五一年……二、三五五、二五七〃	四〇四、一〇八〃

したがってアメリカ人は、その全収穫高の五分の一ないし四分の一を自分で消費している。合衆国産以外の棉花の輸出入については、ぼくはまだ記録をもっていない。合衆国からイギリスへの輸出は収穫高の約五五―六〇%で、フランスへのそれは八分の一である。しかしこの両国はかなり多くを再輸出している。イギリスはフランス、ドイツ、ロシアへ、フランスはスイスへ。」

一八五一年十月。「商業恐慌は〔これは前の手紙を受けて、商業恐慌の件は、というほどの意であろう〕どうなっているか？エコノミストは、恐慌に先立ってきまって現われる慰めやら断言やら挨拶やらをのせている。人は他人には怖れることはないと説きながら、自分では怖れを感じている、ということがよくあるものだ。つぎの本がきみの手に入るならば――『ジョンストン、北アメリカ・ノート、二巻、一八五一年』――、きみはいろいろ興味ある記録をそのなかに見出すであろう〔これは右のようにエンゲルスがアメリカの棉花収穫高にかんする記録を知らせてくれたことも考えて、こんどはマルクスの方から知らせようとしたものであろうか〕」（一八五一年十月十三日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）。これにたいするエンゲルスの返事、――「当地で恐慌がどうなってゆくかは、まだなんともいえない。前週は女王の件のためになにごとも起きなかった。今週もまだ大したことはない。しかし、原料はまだしっかりした値をつけているのに市場は下向きの傾向をとっている。二、三週間のうちに（in einigen Wochen）両方ともいちじるしく下がるだろう、そしていまの見込みでは、おそらく原料よりも製品の方がより一層下がり、したがって紡績業者、織物業者、捺染業者の利益は減らざるをえないであろう。これだけでもかなりあぶない。ところがアメリカの市場はまさに枯れそうだし、ドイツからの知らせもきわめていいというわけではない。このまま諸市場の凋落（Absterben der Märkte）がつづいてゆくなら、二、三週間のうちに（in ein paar Wochen）大詰のはじまり（Anfang des Endes）が見られることだろう。アメリカでは、不況（pressure）と破産（合計一六百万ドルの負債）とがすでに実際のはじまりなのか、それともただの前兆（Sturmvögel〔時化鳥〕）なのか、どちらともいいにくい。ともかく当地ではすでにいちじるしい前兆が現われている（Jedenfalls sind hier schon sehr bedeutende Sturmvögel in Gang）。鉄取引はまったく麻痺しており、そしてこれにとくに貨幣を供給していた二つの銀行――ニューポートの――がつぶれた。ロンドンやリヴァプ

ールでの最近の破産のほか、今度はグラスゴーのある油脂相場師が、またロンドンの株式取引所ではトマス・アルソップ氏がつぶれた。今日は羊毛や絹や金物地方からの報告は見なかったが、これもあまり景気のよいものではないであろう。いずれにせよいまやきざしは歴然たるものであって、来春の大陸での発作がまったくうるわしい恐慌と時を同じくする見込みが、いやほとんどその確実性が存する（Jedenfalls sind die Anzeichen jetzt gar nicht mehr zu verkennen, und die Aussicht,ja fast die Gewißheit ist vorhanden, daß die kontinentalen Kräimpfe des nächsten Frühjahrs mit einer ganz hübschen Krise zusammenfallen）。オーストラリアさえあまり助けにならぬように見える。金鉱発見はカリフォルニア以来珍らしくなくなって、世間も驚かない。それは普通の商売になりはじめている。そして周囲の諸市場自身が供給過剰になっており……」（一八五一年十月十五日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

さきに見たように、マルクス、エンゲルスは一八五〇年の一月―四月に書かれた「評論」において、商業恐慌と革命とが、世界市場の中心であるイギリスにおける商業恐慌と大陸での――とくに一八四八年の革命の中心をなしたフランスにおける――革命とが「時を同じくする」であろうという見透しをくり返し述べていた。同年秋の第三「評論」ではイギリスは現在「繁栄」期にあり、ドイツ、フランスでもまたそうであるとして、第一、第二「評論」での恐慌切迫、そしてまた大陸での革命のもり返しが間近かだという見方を一応捨て、「あらたな革命はあらたな恐慌の結果としてのみ可能である」と述べていたこともさきに見たところである。そしてまたさきに、この両人、とくにマルクスは、爾後「あらたな恐慌」の到来を鶴首し、その徴候が現われないかとつねに注意し待望することとなったと記しておいたが、いまここで見ているように、エンゲルスがしきりに商業恐慌の「徴候」についてかれの商売上の見聞をマルクスに書送っているのも、こうしたマルクスの――といっても両人ともにとってのことにはちがいないが―

―「待望」に応じようとしたものであった。ところで右の一八五一年十月十五日付の手紙に見られるようにエンゲルスは、イギリスでの「きざし」はいまや歴然たるものがあり「来春の大陸での発作」と「恐慌」とが「時を同じくする」「ほとんど確実性」がある、と述べている。このイギリスでの「きざし」がその後どのようになっていったか、どのように観察されているかについては、このあとひきつづいて見てゆくわけであるが、他方の「大陸での発作」はこの手紙のすぐあとルイ・ボナパルトのクーデターによって立消えとなってしまった。[4)5)]

（4）エンゲルスもすでにこの一八五一年十月十五日付の手紙の末尾、つまり上に掲げておいた記述についで、「ルイ・ナポレオン氏もついにフォーシェ（Faucher）氏〔時の内務大臣〕を罷免する決心をした。……そちらではもっと新聞を見ているだろう」と記しているが、ついで同月十九日付のエンゲルス宛の手紙において、マルクスは「ルイ・ボナパルトの突然の方向転換」について述べているなかでつぎのようにいっている、――「いずれにせよ、いまや『革命』――爆発という意味での――は魔法で逐い払われた（ist…eskamotiert）。普通選挙制ではそんなことは考えられない。……これだけはたしかだ。すなわち、この急転で、一八五二年五月〔大統領改選〕を期しての蜂起は挫折した。いまではせいぜい、支配的な党派のうちの一つがクーデターでもやれば、それ以前に勃発するかもしれぬ、というくらいのところだ。」

いま『ブリュメール十八日』によってこの間の事の運びを摘記しておこう。「〔一八五一年〕十月十日ボナパルトは普通選挙権を復活させたいという決意を大臣たちに告げ、十六日にかれらを罷免し、二十六日にはパリはトリニー（Thorigny）内閣の成立を知った。これと同時に警察長官カルリエ（Carlier）はモーパ（Maupas）と交替させられ、第一師団長マーニャン（Magnan）はもっとも信頼しうる各連隊を首都に集結した。……〔十一月四日〕国民議会は再開劈頭の第一日に、普通選挙権の復活と一八五〇年五月三十一日の法律〔普通選挙制を廃止した選挙法〕の廃止とを要求したボナパルトの使書を受取った。かれの大臣たちは同日この趣旨の訓令を提案した。議会は大臣の緊急動議を即時否決し」云々（大月『選集』、第五巻、三八二―三ページ、Ausgewählte Schriften, Bd. I, S. 300）。かくして、同年十二月二日にボナパルトのクーデターにいたったわけである。

十二月三日付エンゲルスからマルクスへ、――「フランスの事件はもっとも完成された喜劇の段階に入った。……このブリュメール十八日の茶番（Travestie）以上にこっけいなものが世にあろうか」。十二月九日付マルクスからエンゲルスへ、――

「パリの悲喜劇的事件にすっかり面くらって、返事を待たせてしまった」。またエンゲルスはつぎのように述べている、――「プロレタリアートとブルジョアジーとの間の問題がかなりはっきりと提起された最後の機会は、一八五〇年の選挙法のさいであったが、そのとき民衆は戦わない方を択んだ。このことと、たえず一八五二年にはといっていたこととは、すでにたるんでいた証拠だった。そしてそれは、商業恐慌の場合は別として、われわれに一八五二年にたいしてもかなり不吉な予想をさせるに十分だった」と（一八五一年十二月十一日付マルクス宛の手紙）。

(5) 『ブリュメール十八日(Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte)』は「一八五一年十二月から一八五二年三月までの時期」にマルクスによって書かれた(Ausgewählte Schriften, Bd. I, S. 318)。このなかでマルクスは一八五一年のフランスの経済事情について特徴づけを行っているが――マルクスはフランス・ブルジョアジーが「事業パニック」(a. a. O. S. 298) のなかにあって政治の混迷、喧騒の終結を、秩序を、一そう強く欲していたことを指摘している――、そこでかんれんしてイギリスの情勢についても言及されているので、左にこれを掲げておこう。『商業が好調のときには――一八五一年のはじめにはまだそうであった――……。商業が不調のときには――一八五一年二月末以来ずっとつづいている――……。／たしかにフランスは一八五一年に一種の小さな商業恐慌を経験した。二月末には一八五〇年にくらべて輸出の減少が現われ、三月には商業が苦しくなって工場が閉鎖され、四月には工業部門の状態は二月事件後のように絶望的となり、五月にも事業はなお回復せず、六月二十八日にもまだフランス銀行の帳簿は預金のおびただしい増加と手形前貸の同じくいちじるしい減少とによって生産の停滞を示していた。そして十月なかばにいたってはじめて事業の徐々の好転がふたたびはじまった。……フランスでは工場が閉鎖されたが、イギリスでは商業上の破産が勃発した。フランスでは工業上のパニックが四、五月に頂点に達したが、イギリスでは商業上のパニックが四、五月に頂点に達した。フランスと同じくイギリスの羊毛工業もくるしみ、フランスと同じくイギリスの絹マニュファクチュアもくるしんだ。イギリスの木綿工場は操業をつづけていたが、もはや一八四九年や一八五〇年のような利潤はあげていなかった。差異はただ、恐慌はフランスでは工業的であったが、イギリスでは商業的であった(die Krise in Frankreich industriell, in England kommerziell) ということ、フランスでは工場が休止し、イギリスでは拡張された――だが以前の年よりも不利な条件のもとで――ということ、フランスでは主な打撃をうけたのは輸出であったが、イギリスでは輸入であったということ、だけであった。共通の原因は……はっきりしていた。一八四九年と一八五〇年とは最大の物質的繁栄と過剰生産――これは一八五一年にはじめてかかるものとして現われてきた――との年であった。こ

の過剰生産はこの年のはじめ、産業博覧会〔一八五一年にロンドンで開かれた〕を見越してさらにとくに促進された。このほか独特な事情としてつぎのようなことが加わった、――はじめには一八五〇、五一年の棉花収穫は不作と見られていたが、その後予想より収獲が多いことが確実となったこと、棉花価格がはじめには上り、その後急に下った、つまり価格が動揺したこと。生糸の産額は、すくなくともフランスではまだ平均産額以下であった。最後に、毛織物製造は一八四八年以来非常に拡張されたので、羊毛生産がこれに追いつけず、原毛の価格は羊毛製品の価格とまったく不釣合いに騰貴した。かくてここに、三つの世界市場工業の原料のうちに、すでに商業停滞の三重の材料があるわけである。こうした特別の事情を別とすれば、一八五一年の外観上の恐慌（scheinbare Krise）は、過剰生産と過剰投機とが産業循環の過程においていつでもやる一休み（der Halt, den Überproduktion und Überspekulation jedesmal in der Beschreibung des industriellen Kreislaufes macht）――それらが最後の循環の一こまを疾駆してその終着点たる一般的商業恐慌にふたたび辿りつくために、全力をふりしぼる、その前になすところの――にほかならなかったのである〔ところが事実はそうしたものではなく、たんなる停滞であったわけである〕。商業史のこのような幕間に、イギリスでは商業上の破産が勃発し、他方フランスでは工業自身が停止される。というのは、一つには、丁度その時あらゆる市場でイギリス人との競争が堪えがたいものとなってきて退却を余儀なくされるからであり、また一つには、奢侈品工業としていかなる事業停滞からもとくに打撃を受けやすいからである。かくてフランスは、一般的恐慌のほかにこの国独自の国民的な商業恐慌（seine eignen nationalen Handelskrisen）を受けるが、とはいえこれはフランスの地方的な影響よりもはるかに大きく世界市場の一般的な状態によって、規定され制約される。フランスのブルジョアジーの偏見にイギリスのブルジョアジーの判断を対置させてみることは、あながち興味のないことではないであろう〔「フランスのブルジョアジーは、この商業停滞を、純粋に政治的な理由から、議会と執行権力との間の闘争から、国家形態が臨時的なものにすぎなく不安定であることから、一八五二年五月の第二日曜日〔この日に共和国大統領の任期が終り、その改選が行われることになっていた〕にたいする恐怖的な予想から、説明した」（S. 296）〕。もっとも大きなリヴァプールの商社の一つは一八五一年にたいするその年次事業報告書のなかでつぎのように書いている。『いま過ぎ去っていった年ほど、その年のはじめに抱いた予想が裏切られた年はあまりない。人々が等しく予期していた大きな繁栄のかわりに、四半世紀このかたもっともがっかりさせた年の一つとなった。もちろんこのことは商業階級にだけあてはまることであって、工業階級にはあてはまらない。しかも、年のはじめには反対のことを結論すべき確固たる理由があったのである。すなわち製品の在庫は乏しく、資本は

ありあまっており、食料品は安く、豊饒の秋はたしかであった。大陸では平和がつづき、国内にはなんら政治的、または財政的障害はなかった。事実、商業の翼がこんなに束縛されていなかったことはなかったのである。……しからばこの不都合な結果はなんのせいであるか？　われわれは輸入も輸出も取引過剰であったためだと信じている。わが国の商人たちがみずからその活動をもっと狭い限度にとどめないならば、われわれの脱線を喰止めうるものは三年に一度のパニック以外にはない」〔Ausgewählte Schriften 編集者はここに「一八五二年一月十日付『エコノミスト』二九―三〇ページ」という脚註を入れている〕」（大月『選集』第五巻、三七五―八〇ページ、Ausgewählte Schriften, Bd. I, S. 294―8. 傍点および〔　〕内―三宅）。

五

このようにして「来春の大陸での発作」はすくなくとも近い将来に期待することはできなくなったが、一方のイギリスでの恐慌近しという情勢もまたひきゆるんできて、むしろ好況たることを示してきた。

エンゲルスは右の註（4）のおわりに掲げた同じ手紙の末尾につぎのように記している、――「リヴァプール市場――昨日の相場で平穏。マンチェスター市場――しっかり。若干の過剰取引がレヴァントの方へつづけられている。ドイツの買手はひきつづき市場に寄りつかない」（一八五一年十二月十一日付マルクス宛の手紙）。

一八五二年一月。　「一八五一年にはイギリスの綿業は毎週三二、〇〇〇梱――一八五〇年には二九、〇〇〇梱だったのにたいし――を消費した。増加分全部、いやそれ以上かなり多くが、東インドとシナに行った。この両市場の供給過剰と国内取引とでいまやっとマンチェスターが養われている、というのは大陸へはごくわずかしか出ていないのだから。こういうことはもう長くはつづきえない。ここでは物事が非常に極端に走る。たとえば、棉花価格が、未曾有の大収穫にもかかわらず、たんにそれ以上の消費を見越してさかんに騰貴しはじめていることは、すでにそれを十

分に示すものだ」（一八五二年一月六日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

一八五二年二月。「商業の件については、どうもぼくにはよくわからない（Was die Handelsgeschichte angeht, so werde ich nicht mehr klug daraus）。あるときは、恐慌が戸口に迫り、シティが沈滞し切ったかと思うと、たちまちにしてすべてがまた立直る（Bald scheint die Krise vor der Tür zu stehn, die City niedergeschlagen, bald alles wieder obenauf）。こんなことが破局を妨げるものではない。だが現実の動きを追究するには、ロンドンはいまのところその場所ではない」（一八五二年二月四日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）。

一八五二年三月。「商業恐慌が解散と同時にやってくるという見込みは残念ながらほとんどない。商業は当地ではひきつづき盛んだ（brillant）。アメリカからの報道はきわめて好調だ。恐慌を遅らせているもの、そしてなおしばらく遅らせうるものは、㈠、カリフォルニアであって、そこへの貿易、ならびに取引に入ってくる大量の金、およびそこへの移住、要するに、カリフォルニアが全合衆国に与えている全刺戦。㈡、一八四九年および一八五〇年の棉花の高値のために木棉工業が抑えられていたこと、木棉工業はやっと一八五一年の春から順調に（flott）発展した。㈢、一年半以来の棉花価格の暴落――約五〇パーセント。ニュー・オルレアンスで棉花（中等品）の価格は一八五〇年九月一日に一三セント1/2、リヴァプールで七ペンス3/4であった。いまではニュー・オルレアンスで中等品が七セント5/8リヴァプールで四ペンス7/8であり、一時は七セントであった。このことはいうまでもなく消費をいちじるしく増加せしめずにはおかない。昨年――一月および二月――は当地の綿業地域で毎週二九、〇〇〇梱が消費されたが、今年は三三、〇〇〇梱である。しかもこれはアメリカ棉だけのことで、このほかなおスーラット棉、エジプト棉等々がある。この調子でゆくと、イングランドは今年八〇〇―八五〇百万封度の棉花を消費することになる。㈣、投機にたい

する一般の臆病、それは一度も金鉱や汽船に長く熱中しようとしない。ぼくの見るすべてから判断して思うに、全世界が供給過剰となるには、いまのような強行的生産があと六ヵ月もつづけば足るにちがいない。さらにその上に、商品が行先地に着いて決定的な供給過剰のしらせが戻ってくるまでの期間、ならびに、人々がパニックに襲われたとさとるまでの中間期間を約四ヵ月とすると、一八五二年十一月から一八五三年二月までの時期がおそらく恐慌勃発の可能性がもっとも濃い時期（die wahrscheinlichste）であろう。しかしこれはすべて当て推量（guess-work）だから、すでに九月に恐慌になるということも同様にありえよう。だがこの恐慌はおもしろいものとなる（schön werden）であろう、というのは、このように大量のあらゆる商品が市場に投げ出されたことはいまだかつてないことであり、またこのように巨大な生産手段もかつて存在したことがないからである。エンジニャーの愚かなストライキはたしかにすくなくとも一ヵ月は恐慌のくるのを引留めている。機械は現在まったく製造されていないに等しく、しかもその需要は非常に多い。ヒッバート・フラット・アンド・ソン〔商会〕は当地ならびに外国からの数百の註文を抱えているが、もちろんその一つも実行することができない。この商業方面からのあらしがともかくダービー（Derby）氏[6]を襲うならば、かれにとって具合が悪いことであろう！[7] ぼくの父は、一般の景気がよいのにもかかわらず最近の決算で欠損を出したので」云々（一八五二年三月二日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

（6） ダービーは、当時ホイッグ党のラッセル内閣にかわって成立したトーリー党内閣の首相。この手紙の引用のはじめで「解散」といっているが、総選挙はこの一八五二年七年に行われた。この選挙でトーリー党は絶対多数は占めなかったが、これに反対する三党派――ホイッグ党、ピール派、マンチェスター派の足なみが揃わなかったので政権を維持した。しかしこの年の末十二月にディスレリ（Disraeli）の予算案が否決されて、このダービー内閣は辞職し、かわってアバディーン（Aberdeen）連立内閣（ホイッグ党とピール派）が成立した。

（7）エンゲルスはこのすぐあとのマルクス宛の手紙のなかでも、「かれ〔ダービー〕がすぐに解散しないのは馬鹿だ。かれがぐずぐずしていればいるほど、かれはますます選挙を商業恐慌のなかに持込む危険を冒すことになる」といっている（一八五二年三月十八日付）。

一八五二年四月。「現在の商業の模様についてはとくに東インドにかんして無視されてならない一つの点がある。東インドへのイギリス工業製品の輸入は三年このかたひきつづき増大しつつ巨額にのぼっているにかかわらず、近来ふたたびかの地からかなりよい報道が入ってくる。在庫品は次第に捌けて〔一八五一年七月―九月に東インドは「滞貨状態」「供給過剰」と記していたことを想起されたい〕、かの地では良い値が出ているという。その原因はつぎのことでしかありえない、すなわち、ついにイギリス人によって征服されたシンドやパンジャプ等々の地方では、従来はほとんどもっぱら土着の手仕事が保たれていたが、これがいまやついにイギリスの競争によって圧しつぶされている、ということである。これは、当地の製造業者たちがやっと最近これらの市場に適する織物をつくるようになったからでもあろうし、インドに普通輸出されるイギリスの織物の方が安いために土着民が土産の織物にたいするかれらの好みをついに犠牲にしたからでもあろう。最近一八四七年のインドの恐慌とこれと関連しているインドにおけるイギリス製品の大きな値下りとは、これに大いに寄与したことであろう。……しかし、これから最近の収穫の三、〇〇〇、〇〇〇梱の棉花が市場に出て加工され、そして完成品として大部分東インドに送られるならば、事情はすでに変わるであろう。いまや木棉工業は大いに栄えており（floriert）、ために、一八四八―四九年度を三〇〇、〇〇〇梱ほど凌ぐ今期の収穫にもかかわらず棉花価格はアメリカでも当地でも騰貴しているほどであり、またアメリカの工場主たちは前年（かれらは全体で四一八、〇〇〇梱しか消費しなかった）よりもすでに二五〇、〇〇〇梱以上も多く買付けたほどであり、

また当地の工場主たちは三百万梱の収穫でさえかれらの消費にとって十分でないだろうとすでにいいはじめているほどである。いままでに、アメリカからの輸出は前年よりもイギリスへは一七四、〇〇〇梱、フランスへは五六、〇〇〇梱、その他の大陸へは二七、〇〇〇梱、それぞれ多い（それぞれ九月一日から四月七日まで）。そしてこのような繁栄のため、どうしてルイ・ナポレオンがあんなに気楽にその下等帝国を用意しうるかも、まったく容易に説明がつく。一八五〇年にたいし一八五二年のフランスへの棉花の直輸入の超過は、現在までに一一〇、〇〇〇梱（一九二、〇〇〇梱にたいし三〇二、〇〇〇梱）、したがって三三パーセント以上に達している。／あらゆる原則に照して(nach allen Regeln)、恐慌は今年中に起らざるをえないし、またおそらく起るであろう。だが、東インド市場における目下のまったく予期しなかった弾力性と、カリフォルニアとオーストラリアとによってもたらされた混乱と、大ていの原料の廉価――これは同様に工業製品を廉価にする――と、いかなる大きな投機も存しないこと、こういったことを考慮すると、現在の繁栄期は異常に長つづきすると予言したくなりそうだ（so kommt man fast in Versuchung, der gegenwärtigen Prosperitätsperiode eine außerordentlich verlängerte Dauer zu prophezeien）。いずれにしても、この件が春まで〔これを書いているのは四月であるが、この春はこの年の春を指しているのであろう〕つづくということはありうることだ。しかし結局、六カ月程度のうちにもとの原則にしたがうようになることはきわめてたしかだ」（一八五二年四月二十日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。[8]

（8） ここでエンゲルスが『国民経済学批判大綱（Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie）』（一八四四年二月刊の『独仏年誌』所載）、『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年）、『共産主義の諸原理（Grundsätze des kommunismus）』（一八四七年、いうまでもなく『マニフェスト』の基をなしたもの）のなかで示していた見解に触れておこう（傍点―三宅）。いずれも、本稿で考察している時期より以前に書かれたものである。

『国民経済学批判大綱』（「経済的諸範疇の批判についての天才的なスケッチ」――『経済学批判』序言――）――「経済学者は、需要供給にかんするかれのうるわしい理論を携えてやってきて、『過剰に生産されることはけっしてありえない』と諸君に証明する。しかし現実は商業恐慌をもってこれに答えている。この商業恐慌は彗星のように規則的に回帰し、現在平均五年ないし七年ごとに一度やってくる（deren wir jetzt durchschnittlich alle fünf bis sieben Jahre eine haben）。この商業恐慌は〔一七〕八〇年代以来、かつての大流行病と同様に規則的にやってきて――後者以上に貧困と不道徳とを伴った。……諸君が現在の、意識的でない、無思慮の、偶然の支配にまかせられた方法で生産をつづけてゆくかぎり、そのかぎり商業恐慌は依然として存在する。そして、あとからおこる恐慌はすべて、前のものよりもより普遍的（universseller）となり、したがって、より悪化せざるをえない、……」（Marx / Engels, kleine ökonomische Schriftten, S. 28―9,大月選集訳、補巻5、二一七―八ページ）。

『イギリスにおける労働者階級の状態』（このなかでの記述は恐慌についての当時のエンゲルスの見解をもっとも纏った形で示しているものと見ることができる）――「工業と競争との本質、およびそれにもとづく商業恐慌……。欲望を直接に満足させるためにではなく金儲けのために企てられているところの、今日の無規律な生活手段の生産と分配とのもとでは、いつでも（alle Augenblicke）停滞が生ぜざるをえない。たとえばイギリスは、多くの国々にきわめて各種の商品を供給している。そのさい工場主は、それぞれの商品のどれだけの量がそれぞれの国で年々消費されるかということは知っているとしても、各時期にそれらの国にどれだけの在庫品があるかは知らないし、自分の競争者たちがその国にどれだけの量を送るかはなおさら知らない。かれはただ、たえず変動する価格から、在庫品と需要との状態について不確かな推測をなしうるにすぎず、運を天にまかせてその商品を送るほかない。……いささかの吉報でもあると、だれもができるだけ多くを送り出す、――そしてまもなく、こうした市場は商品で溢れてしまい……。産業発達のはじめには、こうした停滞は個々の製造部門と個々の市場とにかぎられていた。しかし競争の集中化作用――これは、ある労働部門で失業した労働者を他の労働部門のうちもっとも容易に習得しうる部門へ投じ、ある市場ではもはや売れなくなった商品を他の市場へ投じ、かくしてしだいに個々の小さな恐慌をより相接近させる――によって、これらの小さな恐慌はだんだんただ一並びの週期的に回帰する恐慌に統合された。このような恐慌は繁栄と一般的好況との短い時期につづいて、五年ごとにやってくるのを（alle fünf Jahre auf eine kurze Periode der Blüte…zu folgen）つねとしている。……〔ここで恐慌期の様相が描かれている〕……しだいに事態がよくなってくる。堆積され

ていた商品ストックは消費される。商人や工業家は一般的に意気銷沈しているので、その売れたあとの隙間はあまり急速には埋められないが、ついに価格が上昇し、あらゆる方面から吉報が入ってくるので、活動が復活される。……〔ここで繁栄期の様相、ついでそれが恐慌にいたる経過が描かれている〕……このようにしてたえず、繁栄（Blüte）、恐慌とつづいてゆく。そしてイギリスの産業がそのなかで動いているこの永遠の循環は、既述のように五年または六年ごとに一巡するのをつねとしている」（Die Lage,…… Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 121—4, 改造社全集訳、第三巻、一一〇—二ページ、大月選集訳、補巻2、一二八—三二ページ）。「たとえば一八四二年の恐慌をとってみよう、これは、一番最近のものであったからまたもっともはげしいものでもあった、——というのは、恐慌の強度はくり返されるたびごとに増大するからである。そしてこのつぎの、おそくも一八四七年にはくるであろう恐慌は、どう見てもなお一そう激烈かつ持続的なものであろう」（a. a. O. 127—8, 改造社全集訳、一一五ページ、大月選集訳、一三六ページ。なお、後年においてはこの「一八四二年」については、「一八三七年の恐慌——これは長い後陣痛をともない、一八四二年にはもう一度完全な後産的恐慌（Nachkrise）が生じた——」と述べている。——『資本論』第三部第五篇中のエンゲルスの書入れ、インスティトゥート版、Bd. Ⅲ, S. 600, 長谷部訳、青木版七八三ページ）。「プロレタリアートのあらゆる自立的発展のもっとも強力な槓杆たる商業恐慌は、外国の競争ならびに中産階級の増大しつつある没落と相俟って、事態にもっと短くきりをつけるであろう。私は人民がもうあと一回以上恐慌の機を逸するとは信じない。一八四六年か一八四七年にやってくるつぎの恐慌は、おそらく、すでに穀物法の廃止と人民憲章とをもたらすであろう。この憲章が革命運動になにをひきおこすかは、期待さるべきである。ところでそのつぎの恐慌までには——この恐慌は、これまでの恐慌から類推すると一八五二年か一八五三年にやってくるはずであるが、しかし穀物法の廃止によって遅れるかもしれないし〔穀物法は一八四六年六月に廃止となった〕、同様に外国の競争等々の他の事情によって速められるかもしれない——、このそのつぎの恐慌までには、イギリスの人民は、資本家の利益のために搾取され、そして資本家がかれらをもはや必要としなくなるときには飢餓におとされるということには、真にあきあきしていることであろう。もしそれまでにイギリスのブルジョアジーが自覚しない場合には——そしてかれらはどう見てもたしかにそうしそうもないが——、以前のどの革命も較べものにならないような革命がつづいて生じるであろう」（a. a. O. S. 354—5, 改造社全集訳、三〇七——八ページ、大月選集訳、四四〇——一ページ）。なお、「本書の本文では、大産業恐慌の循環週期は五年ごとと述べられている。これは、一八二五年から一八四二年にいたる出来事の推移から一見して結論された年月規定であった」（『状態』一

八九二年版への「序言」、前稿「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」㈠、本誌第十巻三号七七ページ参照）。

『共産主義の諸原理』――「今世紀の初頭以来、産業の状態はたえず繁栄期と恐慌期との間を行ったり来たりしてきた（hat zwischen Epochen der Prosperität und Epochen der Krise geschwankt）。そしてほとんど規則的に五年ないし七年ごとに（alle fünf bis sieben Jahre）このような恐慌がおこり、それは、労働者のきわめてはなはだしい貧困や、一般的な革命的興奮や、現存の状態全体にとってのきわめていちじるしい危険と結びついていた」（Marx / Engels, kleine ökonomische Schriften, S. 209, 大月選集訳、第二巻、四七一ページ）。

なおマルクスもまた、たとえば「自由貿易問題についての講演（Rede über die Frage des Freihandels）」（一八四八年一月九日）のなかでつぎのように述べている。――「原則として、経済学においては、ある一カ年の数字を集めてそこから一般的法則をひき出すようなことは、けっしてしてはならない。つねに六年ないし七年――近代産業が繁栄、過剰生産、停滞、恐慌という種々の局面を経て、その不可避的な循環を完了するところの期間――の平均を採らねばならない」（(Marx / Engels, kleine ökonomische Schriften, S. 515, 大月選集訳、第二巻、三八九ページ）。

一八五二年五月。　「三週間前に、ぼくの期待どおりに、棉花市場に投機への大浪がやってきた。だが機はまだ十分に高まっておらず、また当地の紡績業者や商人たちも反対に動いたので、事もたちまちお流れとなった。だが、アメリカでの大量の収穫が全部引渡されたら、たちまちすぐにまたはじまるだろう。羊毛もまた――オーストラリアの羊牧の突然の荒廃のために――すばらしく投機商品になりそうだ。そして一般に、秋までには投機がたけなわになりそうな（in schönster Blüte stehen wird）見込みが十分ある。鉄道その他の株はふたたび上りはじめている、――比較的よい株は、預金資本にたいしていまなお銀行から支払われる一ないし一パーセント1/2をますます上廻る利を生んでいる「一パーセント程度の預金利子とくらべられているのはどういうことかよくわからない。またここで「利を生んでいる」と訳したのは rentieren であるがこれが利廻りを指しているのだとすると、いうまでもなく株価が上れば利廻りは下るわけであるから

『ますます上廻る」immer mehr als といっている方がわからなくなる。あるいはここは immer weniger als の書誤り?」。アメリカでは棉花の投機がもう六週間も前から盛んに行われており、そして、いまいたるところで広告されている種々の新奇な株式会社は、いかにすべての大きな金融市場で資本が出口を手探りしているかを示すものだ。これを要するに、時化を告げる鳥がいまではすでにかなりはっきりと、かつ大群をなして現われている。これはおもしろくなるだろう（Cela sera beau)」（一八五二年五月二十二日付マルクス宛のエンゲルスの手紙)。

一八五二年八月。「フランスでは、『ガゼット・アグリコル』によれば、つぎの収穫は平年よりも三分の一の減少だ、これはJ・B・セーによれば、フランスでは飢饉に等しい。ドイツでは普通作だ。イギリスではすでに穀物買入れのために〔イングランド〕銀行から金が流出している。それにシティではきちがいじみた投機だ。先週は株式取引所で破産だ。最後に北アメリカでは、ぼくがニューヨーク・ヘラルドで見るところでは、鉄道、銀行、建築における狂気きわまる投機、信用制度の未曽有の膨脹、等々だ。これは恐慌が近づきつつあるでのはないか？（Ist das nicht approaching crisis?）革命は、われわれにとって望ましい以上に早く（früher…als uns erwünscht）来るかもしれない。革命家たちがパンの心配をしなければならないとすれば、これほど困ったことはない」（一八五二年八月十九日付エンゲルス宛のマルクスの手紙)。これにたいするエンゲルスの返事、――「最近の破産は前徴（Vorläufer）にすぎなかったけれども、たしかに恐慌は来ようとしているようだ。残念ながら、北東ドイツ、ポーランド、ロシアでの収穫は悪くなく、ところによっては良くなるようだ。ここでは最近の好天気も効きめがあった。しかしフランスはやはり飢饉状態にある、そしてこれだけですでに十分だ。――金融市場での小さなパニックは通りすぎたらしい。コンソルや鉄道株はふたたび順調に上り、金融は楽になってきており、投機はいまなお穀物、棉花、汽船、採鉱、等々に非常に

分散している（sehr verteilt auf Korn...）。しかし（doch）棉花ではすでに非常な冒険が行われていて、いまのところ大した収穫が予想されているのに価格はひきつづき上っている、それはまったく、大量の消費と、あらたな供給がはじまる前に棉花不足が短期間現われるかもしれぬという可能性とによるものだ。それはともかくとして（übrigens）今度は完全な投機熱が恐慌に先立つ、とはぼくには思われない。またもし事態が都合よくゆけば（und wenn sonst die Umstände günstig sind）〔この「都合よく」というのはもちろん恐慌を待望する立場から見ての意〕、東インドからの二三の凶報やニューヨークでのパニックなどが、多くの有徳な市民がまったくこっそりといろいろな思惑をやっていたことを、すぐに証明するだろう。そして供給過剰の諸市場からのかかる決定的な凶報もまもなく来るにちがいない。シナと東インドへはたえず大量に送られているが、しかしとくに変ったしらせはない（und doch sind die Nachrichten nicht besonders）。もちろん（ja）、カルカッタは決定的に滞貨になっており、あちこちで土着の商人が破産している〔さきの四月二十日付の手紙で土産の製品がイギリス製品によって押しのけられていると記していたことを思い出されたい。なおそこで引用を省いておいたが、エンゲルスは「近頃カルカッタやボンベイで一八四七年の歴史が一そう強められた形でくり返された」と記している〕。十月か十一月までよりも長く繁栄がつづくとは信じられない。〔右の数行のエンゲルスの書き方は一寸読取りにくい言廻しのように思われるので、念のためすこし多くドイツ文を挿んでおいた〕……／だがそれはそうと、恐慌がただちに――ただちにというのは六ヵ月から八ヵ月のうちに――革命を生み出すかどうかは、なんといっても恐慌の強度いかんにかかるところが大きい。フランスの凶作は、そこでなにか起りそうな気配を示している。しかし、恐慌が慢性的となり、また収穫が結局予想よりいくぶん良好になれば、現状はまだ一八五四年までつづくかもしれない。白状すると、ぼくはもう一年勉強する時間がほしい、まだやりとげたいことがたくさんある。／オーストラリアも

害をなしている（schadet）〔恐慌到来にたいしての意〕。まず直接に金によって、また金以外のあらゆる輸出をやめていることによって、またそれとかんれんしてあらゆる商品の輸入の増加によって、それから毎週五千人の割合での当地の過剰人口の移住によって。カリフォルニアとオーストラリアとは、マニフェスト〔『共産党宣言』〕では予想されなかった二つの場合だ、――無からのあらたな大市場の創造。これも考慮に入れなければならない」（一八五二年八月二十一日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

一八五二年九月。「〔フランスの〕労働者たちはけっきょくのところ、さしあたりの繁栄と帝国の栄光への期待とでまったくブルジョア気分になっているらしい。かれらがまもなくふたたびいくらか能力あるものになるには、恐慌によるきびしいこらしめが必要であろう。つぎの恐慌がゆるやかなものであれば、ボナパルトは漕ぎ抜けることができる。だがそれはひどく深刻なものになりそうな気配がある。過度投機が生産部面でゆっくりと発展し、したがってその〔過渡投機の〕諸結果が発展するのに製品取引や証券取引において〔過渡投機が生じたさいに〕要する月の数と同じ程度の年の数を要するような場合ほど、恐慌が悪性となることはない。そして老ウェリントン（Welligton）とともに旧いイギリスのコモン・センスが埋葬されたばかりでなく、オールド・イングランドそのものがその唯一の生残っていた代表者たるかれとともに埋葬されたのだ。残ったものといえば、ダービーのような供廻りもない賭師やディスレリのようなユダヤ的いかさま師なのだ、――かれらは、ムッシュー・ボナパルトがその伯父の戯画化であるのとまったく同様に、旧いトーリーの戯画なのだ。ここで恐慌がくるなら、すばらしいものとなるだろう（schön werden）。そして、それがさらにいくらか長びいて、一八三七―四二年のように急性のエピソードを伴う慢性的な状態となることこそ、望ましい。それはそうと、暴動（Emeute）のさいには、老ウェリントンは、かれについて知られているすべ

てのところから見て、まったく怖るべき軍将であった、――この男はあらゆることを勉強していた、非常に熱心にあらゆる兵書を研究し、事によく通暁していた。かれは極端な手段にもおののかなかったことだろう！」（一八五二年九月二十四日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

一八五二年十月。「帝国はすばらしく進軍している〔この年十一月二十一日に国民投票で世襲帝政復活が承認され、十二月二日にルイ・ボナパルトはナポレオン三世として皇帝となった〕。ボナパルトは、今度は商業恐慌がイギリスよりもフランスをより狂暴に襲うように努力することを、だれよりもよく心得ている〔ボナパルトのやり方では結局恐慌がそういうことになるだろう、ということを反語的な言廻しでいっているものであろう〕」（一八五二年十月二十七日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）。

一八五二年十一月。「今日のデーリー・ニュースの六面にわたる株式会社の広告……およびこれに加えて約五十から八十にのぼる外国の鉄道、金鉱、汽船、等々の会社は、その不可避的な作用をかならずもたらすであろう。『ますますもって』興味津々だ。幸いにして、木綿工業の過剰生産を早期に中断させえた唯一の事情も除かれた。今度の収穫は三百万梱をはるかにこえ、したがっていままでの最大の収穫となるであろう。そして棉花はまた下落する。だから原料にはことかかないだろう。そこで来年穀物が不作だと、われわれはすばらしい踊り〔騒動〕が見られるだろう。こういうことでもないと、茸のように成長しつつあるオーストラリアやカリフォルニアの市場――そこでは、ほとんど女子供がいなくて町でたくさんの金が湯水のようにつかわれているので、各人の消費が他の土地のほぼ四倍にものぼっている――といった異常な事情があったり、カルカッタの商社がもうすでに搾取しているビルマの新市場があったり、ボンベイやカラチと、インドの北東部や国境諸国（これだけでも非常に大きい）との交易の拡大、等々があっ

たりしているさいなので、来年中になにか決定的なことがやってくるかどうかは、かんたんにいえない」（一八五二年十一月二十九日付マルクス宛エンゲルスの手紙）。

以上「往復書簡」を辿って、さきに記しておいたように一八五二年末にいたる間を見て来た。さきに一区切りとして一八五二年末までをとったのは、既述のように一八五〇年秋に、「もし一八四八年にはじまった工業発展のあたらしい循環が一八四三―四七年のそれと同じ経過を辿るならば、恐慌は一八五二年に勃発するであろう」とし、「過剰生産から生じる過度投機」が「遠からず起らざるをえないという徴候」を挙げていたことにもとづいたものであった。しかし、以上に見られるように、一八五一年七―十月の手紙では「東インドは滞貨状態」、「当地の綿糸布市場はたえず攪乱されている」、「アメリカ」の「諸市場は滞貨状態」、「リヴァプールやロンドンではもう破産が出はじめた」、「当地ではすでにいちじるしい前兆が現われている」、等々と記されていたが、しかしそのあとこうした経済情勢は好転してきた。この点は、前掲の『ブリュメール十八日』のなかの記述がもっともその間の事情を伝えている、――すなわち、「一八四九年と一八五〇年」は「最大の物質的繁栄と過剰生産との年」であって、この「過剰生産」は「一八五一年にはじめてかかるものとして現われてきた」、「イギリス」では「商業上の〔工業上のではなく〕パニックが四五月に頂点に達した」が、「十月なかばにいたって〔これは直接にはフランスについて述べられているものであるが、前後から見て、イギリスについてもほぼ同様であったと見てよいであろう〕はじめて事業の徐々の好転がふたたびはじまった」と。

そしてこれにともなって、一八五一年七―十月の見透しでは、「この商売はおそらく三月まではつづくまい」とか、「この景気のよい〔紡績、織物業者たちの〕操業が三月か四月までつづきさえすれば、過剰生産となり、君を喜ばすであろう」とか、「いずれにせよいまやきざしは歴然たるものであって、来春の大陸での発作〔既述のように、フランス

において、一八五二年五月の大統領の改選を期しての蜂起が宣伝されていた」がまったくうるわしい恐慌と時を同じくする見込みが、いやほとんどその確実性が存する」というように、恐慌は一八五二年の春に来ると期待されていたのであったが――これらはいずれもエンゲルスからの報道であり、エンゲルスの判断であるが、マルクスもまたこれにたいして同じような期待をもったわけであろう――、その一八五二年の二月には、マルクスは「商業の件については、どうもぼくにはよくわからない。あるときは、恐慌が戸口に迫り、シティが沈滞し切ったかと思うと、たちまちにして、すべてがまた立直る」というように懐疑的な言葉を洩らすにいたっているのである。

この一八五二年になってからはエンゲルスの報道も、三月――「商業は当地ではひきつづき盛んだ」、「アメリカからの報道はきわめて好調だ」、四月――「東インド」から「近来ふたたびかなりよい報道が入ってくる」、「いまや木綿工業は大いに栄えており」、現在の繁栄期、と経済の繁栄を告げるように変ってき、そして、五月――「一般に、秋までには投機がたけなわになりそうな見込みが十分ある」というように、投機の発展に期待をつないだりしていたが、年末にいたるまでイギリス経済は波瀾なく繁栄裡にすぎていった。一八五二年のこうした経済情勢下においてどのような見透しを立てていたかを、くり返し摘記しておくと、「一八五二年十一月から一八五三年二月までの時期がおそらく恐慌勃発の可能性がもっとも濃い時期であろう」としつつ、しかし同時に「しかしこれはすべて当て推量だから、すでに九月に恐慌になるということも同様にありえよう」とか（三月、エンゲルス）、「あらゆる原則に照して恐慌は今年中に起らざるをえないし、またおそらく起るであろう。だが」として、諸事情からみて「現在の繁栄期は異常に長つづきすると予言したくなりそうだ。いずれにしても、この件が春までつづくということはありうることだ」（四月、エンゲルス）というように、エンゲルスは期待を以前の一八五二年春から――事実このときがもうその春なので

あるが――一八五二年秋ないし一八五三年春へ延期し、しかもそれについても確信的でなくなってきた。そしてマルクスが（八月）、フランスの凶作、イギリスでの金流出、投機、破産、信用膨脹などから「これは恐慌が近づきつつあるのではないか？」として、これを革命と結びつけて書きよこしたのにたいして、エンゲルスはこれを積極的には肯定せず、一応は、「繁栄」が「十月か十一月までよりも長くつづくとは信じられない」といっていたが、しかし、「フランスの凶作は、そこでなにか起りそうな気配を示している。しかし、恐慌が慢性的となり、また収穫が結局予想よりいくぶん良好になれば、現状はまだ一八五四年までつづくかもしれない」（同八月）と答え、また年末近くになっても、「来年中になにか決定的なことがやってくるかどうかは、かんたんにいえない」（十一月）と述べるにいたっているのである。

繁栄のさなかにあった一八五〇年秋につぎの恐慌勃発を「一八五二年」と予想したのは、さきに見たように、いまの「工業の繁栄」が一八五一年に「なお高められるであろう」と見、そして前の循環を「一八四三―四七年」――つまり循環期間五年――ととらえて、ここから「一八四八年にはじまった工業発展のあたらしい循環」が前と同じ経過を辿るならば「一八五二年」になる、と考えたためであった。そして現実には、一八五一年には停滞がやってき、それが十月なかばから「好転」していったのであるが、この一八五一年の停滞中に、つぎの恐慌勃発を一八五二年の春と予想し、また一八五二年の繁栄に面しても右をすこしずらして一八五二年春に、同年秋ないし一八五三年春と予想していたについては、結果からいって経済の動きについての考察が十分に正しくなかったわけであるということはいま別として、上のように比較的短い循環期間がつねに念頭に置かれていたことによるところがかなり大であったように見受けられる。「原則」として一八五二年のはずである、ないしそれがすこし「おくらせ」られている、という見

方が基礎にあるため、たえず経済の若干の動揺をこれと結びつけて考えていたこと、また現実にたいする観察がこうした循環期間の観点から色づけされていたことは、否定できない。このことはこののちにおいてもしばらく長くひきつづきそうであって、両人の恐慌にたいする見透しについて見るさい、つねに注意されねばならない。これには、現実の循環運動の形が一八四七年恐慌からようやく、ほぼ十年という形をはっきりととりはじめてきつつあったという当時の事情が作用していたわけであり、そしてそうした事情のもとでは、事の性質上、こうした誤認の過程を通じてはじめて現実の運動の正しい認識に逐次近づいてゆきうるわけでもあったであろう。

なおいま一つ、エンゲルスが一八五二年に入ってから、一方において恐慌遠からずという見解を持しつつ、しかし他方において――一八五二年四月二十日付の手紙でもっとも包括的に示されているように――、「東インド市場におけるまったく予期しなかった弾力性」、「カリフォルニアとオーストラリア」、「原料」とくに棉花の「廉価」、「大きな投機」の欠除、といった四つの要因を挙げ、ここから、恐慌到来が「おくらせ」られていること、いいかえれば当時の景気の昂揚、維持が助けられていること――こうした助長要因はそれと同時に反面、より大きく恐慌を爆発させうる要因たるものでもあるが――を説明していることは、注意されねばならない。とくに「カリフォルニアとオーストラリア」――「マニフェストでは予想されなかった二つの場合」――、なかんづくそこでの「金」の産出増大にたいする両人の評価の動きについては、十分な注意を要すると考えられる（なお本誌前号註（6）参照）。

六

ところで、一八五七年恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解を見る上で、手紙と並ぶ主要な材料の一つとし

て、『ニューヨーク・トリビュン（New York Tribune）』や『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング（Neue Oder-Zeitung）』などへ寄せたマルクスの諸論文がある。[9] この『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』へのマルクスの寄稿は一八五四年末から一年ほどの間であったが、『トリビュン』への寄稿は一八五二年八月から、その間消長はあったが約十年にわたった。そしてマルクスが最初に書いたのは、一八五二年七月のイギリスの総選挙に寄せて諸政党の性格づけを行った一連の論文であったが、それについで「被救恤的貧窮と自由貿易。——迫りつつある商業恐慌（Pauperismus und Freihandel. —— Die drohende Handelskrise）[10]」なる論文を書いた。本稿ではこれからあと「往復書簡」と並んで、『トリビュン』および『オーデル・ツァイトゥング』の諸論文を見てゆくこととする。そこでまず右の論文であるが、この論文に附されている日付は一八五二年十月十五日であり、同年十一月一日付の『トリビュン』に掲載された。つまり時期的にいうと、前掲の一八五二年九月二十四日付マルクス宛のエンゲルスの手紙につぐものである。[11]

（9）マルクスと『ニューヨーク・トリビュン』との関係については「往復書簡」のなかからもいろいろ窺えるが、N・リャザノフ編の "Gesammelte Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels 1852 bis 1862" 第一巻のはじめに附されている Einleitung 中の Karl Marx und die New York Tribune. 1851 bis 1856. (S. XVII—L) がくわしい。——一八五七年以降については、予定されていたが刊行されるにいたらなかったところの第三巻、第四巻につけるつもりであったのであろう。また『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』との関係については同上リャザノフ編書の第二巻末に附されている Erläuterungen und Anmerkungen の Vorbemerkungen にしるされている。

（10）Maximilien Rubel: Bibliographie des Œuvres de Karl Marx, Paris, 1956, P.93 では pauperism and Free Trade— The Approaching Commercial Crisis と記されている。なお、この頃はマルクスは原稿をドイツ語で書き、それをエンゲルスに送って英訳してもらっていた。リャザノフ版ではそれがさらに独訳されて与えられているわけである。

マルクス自身が英語で書くようになったのは翌一八五三年一月末からであった、――「ぼくは昨日はじめて、デーナ（Dana.〔『トリビュン』の編集者〕）への論文を自分で英語で書くという冒険をやってみた」（一八五三年一月二十九日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）。のちに見る「死刑。――コブデン氏のパンフレット。――イングランド銀行の布告」がそれである。

(11) 一八五二年十月十二日付エンゲルス宛の手紙でマルクスは、「デーナへの論文。だがこれは全部出してしまわなければならない、というのは次回のためには多くの政治関係のものを持っているから。こいつは非常に頭痛しながらなぐり書きしたものだ（Ich habe das Zeug mit großem Kopfweh geschmiert）。だから飜訳のさいには遠慮なく自由にやってくれたまえ」と書いているが、これが上の論文に当るものと思われる（上の論文の末尾でも「私の次回では、この現下の商工業の繁栄によってつくり出された独特な政治状態を取扱うつもりである」と記されているところから見ても――「商業的発作の政治的諸結果」一八五二年十一月二日付『トリビュン』所載――、これにちがいないであろう）。エンゲルスはこれを十四日に受取って、ただちにその日の夜前半を飜訳して返送し、残りの部分は十八日に返送した（十月十四日付および十八日付マルクス宛のエンゲルスの手紙）。

マルクスがこの論文（Gesammelte Schriften, herausgegeben von N. Rjasanoff, Bd, I, S. 28―34, 改造社全集訳，第五巻、四六四―七〇ページ、大月選集訳、第六巻、一二三―三二ページ、傍点および〔　〕内―三宅）で述べていることはつぎのようなことである。

その前半においては、『エコノミスト』が、トーリー党内閣の商務大臣は近頃の被救恤的貧窮の減少を「アイルランドの飢饉」、海外における金発見等の「自由貿易とはかんけいのない理由からだけ」説明しているが、この被救恤的貧窮の減少は自由貿易のためだとし、かつ自由貿易がさまたげられずに発展しさえすれば「救貧院（Arbeitshäuser〔――workhouse〕）」はイギリスの国土からまったく消滅するであろう、と説いていることをとり上げ、――いうまでもなく穀物条例廃止に反対であったトーリー党にたいして『エコノミスト』は自由貿易の効能を説こうとしていたわけである――、「残念ながら『エコノミスト』の統計は、それが証明すべきはずのことを証明していない」のであ

って、被救恤的貧窮は産業循環にしたがって増減を辿っているのだ、と主張している。すなわち、「われわれの時代の商工業は、周知のように、五年ないし七年の週期的諸局面〔ここでも五年ないし七年といっていることを注意されたい〕を経由する、――そこでは商工業は、静止、活気増大、……という規則的に相ついでおこる種々の段階に投げ込まれ、結局ふたたび静止に帰る」といった運動をとるのであって、『エコノミスト』は一八三四―五二年の救貧費の額を掲げているが、それによると一八三四年六三二万ポンド、それから減少して一八三七年四〇四万ポンド、それから年々増加して一八四三年五二一万ポンド、それからまた減少して一八四六年四九五万ポンド、そのあとまた増加して一八四八年六一八万ポンド、そのあとまた減少して一八五一年四七二万ポンド、となっているが（マルクスの文章ではポンド単位で記されている）、ところで、「一八三四年から一八三七年までの時期は繁栄期であり、一八三八年から一八四二年までの時期は恐慌および停滞の時期であり、一八四三年から一八四六年までは繁栄期、一八四七年と一八四八年とは恐慌および停滞の時期、一八四九年から一八五二年まではふたたび繁栄期であった」とし、かくしてつぎのように述べている。――「したがってこの統計はなにを証明しているか？　それはせいぜいよくしたところで、イギリスの被救恤的貧窮は――自由貿易であると保護貿易であるとにかかわりなく――停滞期と繁栄期とが交替してゆくにつれて増減する、という陳腐なトートロギーを証明しているにすぎない」と。またいう、「ブルジョア的空想家たち……かれらは、一面では、商業循環のあらゆる繁栄期に不可避的に随伴する現象にすぎないものをもって、自由貿易の結果だと主張し、または他面では、ブルジョア的繁栄にたいしてそれが実現しえない事柄を期待する」と。[12)]

（12）『トリビュン』でこのように取扱っていたこの問題はのちの『資本論』においても、「イギリスの被救恤的貧窮の統計をちょっと表面的に調べてみさえすれば、その数が恐慌のたびごとに膨脹し、事業回復のたびごとに減少することがわかる」

(Bd. I. S. 678) とか、また一八五五―六七年のイングランドの公認の被救恤的窮民数を挙げ、そのさい、「被救恤的窮民(Pauper) 統計の分析にさいしては、二つの点が注意されねばならない。一方では、被救恤的窮民数の増減運動は、産業循環上の週期的盛衰を反映する。……」(Bd. I, S. 689) と記されている。この被救恤的貧窮の問題はマルクスにあっては「資本制的蓄積の一般的法則」の一要点と考えられているものであり、それについての考え方を見る上にこの『トリビュン』の記述は、すこし立入ってついてみると、興味あるものを含んでいるのであるが、本稿としては傍道であるので、触れない。

なお、リヤザノフ編書第一巻巻末の「解説と註釈」のところでは、一八四九年（一、六三七、五二三人）から一八五二年（一、〇八〇、九五三人）にいたる被救恤的窮民の数を掲げ、「この減少はなかんづく、アイルランドの窮民数が一八四九年の六二〇、七四七人から（飢饉の結果）一八五二年の一七一、四一八人に減じたことによって説明される」(Bd. I, S. 452) と記している。そのかぎりにおいては、上のトーリー内閣の大臣の説明は、『エコノミスト』はこれにたいして「自由貿易」の効果たることを強調しているのであるが、事態の一応正しい説明であったことになる。また『エコノミスト』の説く「自由貿易もまたもちろん、当時の繁栄にかんけいがなかったわけではない。

さて、この『トリビュン』の論文の後半――ここが表題の「迫りつつある商業恐慌」の部分であるが――において、マルクスは、この繁栄――ブルジョアジーはこれを、自由貿易がつづくかぎりいつまでもつづくように幻想しているが――は産業循環のつねとして恐慌にいたらざるをえないことを指摘し、また現在の繁栄の様相それ自身のなかにその恐慌の性格を窺うことができるとするとともに、「一八五三年にこうした破局に突入することはいろいろな徴候がこれを示している」と述べている。――「一八五二年という年は、イギリスがこれまで味ったきわめてすぐれた繁栄の年のうちの一つである、……国家収入の大きさ、海運報告、輸出統計、金融市場の諸記録、なかんづく工場地帯の未曽有の活動、すべてこれらのことはこの事実にたいするもっとも拒みがたい証拠である。／しかし、十九世紀初頭の商業史についてほんの表面的にでも通暁している人なら、産業循環が、そこから過剰投機と崩壊とに移行してゆく発作期[13]（Periode des Paroxysmus, 傍点―マルクス）に入る瞬間がもう遠くないことを確信しているであろう。

『いや、けっしてそんなことはない』とブルジョア楽観論者は叫ぶ。『以前のどの繁栄期でも現在のように投機がすくなかったことはなかった。現在のわが国の繁栄は直接的に有用な物品の生産に基づいている。これらの物品は、市場に現われるとほとんどすぐに消費され、生産者にそこから適度の利潤をひき出させ、また生産の更新と拡大とを刺戟する』。[14] ／このことを別の言葉でいうと、現下の繁栄期を特徴づけているものは、現存の過剰資本が直接に工業生産に殺到したし、また殺到しているという事実である」。ここでマルクスは、「最高工場検査官レオナード・ホーナー（Leonard Horner）の最近の報告書によると、一八五一年には木綿工場だけで三、七一七馬力の増加が行われた。かれは目下建築中のほとんど無数の工場を算え上げている」云々として、紡績、織物工場が諸所で建築されつつあるというホーナーの報告を引き、「では、直接的な工業生産を目的としたこの巨大な資本投下からなにが結果として生じるか？　恐慌はやってこないだろうということか？　けっしてそうではない。その反対に、恐慌は一八四七年におけるよりも――そこでは恐慌は工業恐慌の性格よりもより多く商業的、金融的恐慌の性格を帯びた（wo sie mehr den Charakter einer kommerziellen und Geldkrisis trug als den einer industriellen）[15]――ずっと危険な（gefährlich）性格をとるであろう。このたびは恐慌は、非常な勢いで工場地帯（傍点―マルクス）を襲うであろう。一八三八年から一八四二年にいたる停滞を想起してみよう、これは同様に工業の過剰生産の直接的結果であったのである。過剰な資本が、投機の多様な水路に注がれないで、工業生産に集中されればされるほど、労働者群とブルジョアジーのまさに精英（Elite, 傍点―マルクス）とは、ますます、より広汎に、より長きにわたって、より直接的に、恐慌に見舞われることになろう。そして、この急変の瞬間、すでに市場にある莫大な全商品量が一挙に厄介な重荷になるときに、この重荷はこれら多数の拡張または新設された工場にあっては――これら工場は、丁度作業を開始しうるまでに

進捗しており、そしてこれらにとってはただちに作業を開始しうることが死活の問題である――どれだけより一そう重荷となることであろうか。資本が商業界におけるその通常の流通路を離れるときにはいつのときでも（Jedesmal, wenn das Kapital seine gewohnten Zirkulationskanäle in der Handelswelt verläßt）、強力的なパニックが生じ、それ〔そのパニック〕はイングランド銀行の内部においてすら感じられる。莫大な金額が工場、機械、等々の形で固定資本となっていて、それらが丁度恐慌開始のさいに作業をはじめるようなとき、またはその一部では作業しうるようになるまでにさらにある額の流動資本を要するようなとき、こういった瞬間においては、右のような総崩れはどれだけより一そうの作用をもたらさざるをえないであろうか。」

このたびは資本が工業生産に――投機にではなく――殺到しているということは、すでに見た一八五〇年に書かれた『新ライン新聞―政治経済評論』のなかの「評論」においても、特徴としてくり返し述べられていたことであった（たとえば、「繁栄期の過剰な資本はその通常のはけ口を閉されていた。……このようにして、さもなければ別の方法で使用されたであろう資本の大きな部分が直接に工業に流入したので、工業生産は当然異常に急激に増大せざるをえず、そしてそれとともに市場の過充、したがって恐慌の勃発はいちじるしく促進されざるをえなかった」――本誌前号、五三ページ）。そしてそのさい筆者は、ここで示されている見透しはそのまま実るものとはならなかったとはいえ、一八五七年恐慌が一八四七年恐慌のいわば商業的性格とちがってとくに工業的性格をもっていたということにたいしてはともかく事実上先見的であったと記しておいたが、それから二年半ばかり経っているここでも、同じく工業生産の大きな拡張によって「このたびは恐慌は非常な勢いで工場地帯を襲うであろう」ことが予期されている。なおここで『ブリュメール十八日』のなかで、一八五一年の景気後退について、「イギリスでは商業上のパニックが四、五月に頂点に達した。……恐慌はフラ

ンスでは工業的であったが、イギリスでは商業的であった、……フランスでは工場が休止し、イギリスでは拡張された」と述べていたことも、併せ想起されてしかるべきであろう。また観点を変えて見ると、これらの記述は、当時イギリスにおいて生産拡張がきわめていちじるしくつづけられていたことを窺わしめるに足ろう。

(13) 「発作期 (Periode des Paroxysmus)」――さきにこの論文のはじめに「五年ないし七年の週期的諸局面」と記していたところでマルクスは、「規則的に相ついでおこる種々の段階」を Stadien von Ruhe, Belebung, wachsendem Vertrauen, lebhaftem Geschäftsgang, Prosperität, Paroxismus〔Paroxysmus〕, Überproduktion, Kracb, Einschränkung der Produktion, Stagnation und Notlage と記している。前記のようにこれは独、英、独と二重に訳されたものであるが『トリビュン』にも paroxysm と記されていたのであろう。しかし前記の M. Rubel の書ではこのつぎの論文の表題「商業的発作の政治的諸結果」――リャザノフ版では… des kommerziellen Paroxysmus――が、……of the Commercial Excitement と記されている (P.93)。これからみると、たしかなことはわからない。

(14) これは一八五〇年十月十九日付『エコノミスト』から採ったもの、本誌前号六四―五ページ参照。

(15) ちなみに、ここの kommerzielle Krisis というのは Handelskrise と同じではない。Handelskrise という語は、あるいはたとえば Produktions- und Handelskrise というように用いられていることもあるが(『資本論』, Bd. I, S. 143, Fußnote 99)、マルクスは一般にいわゆる経済恐慌の意味に用いており、したがってここの Geldkrisis や industrielle Krisis をも含むものであるのにたいし、ここの kommerzielle Krisis はこれらと並ぶ商業面での恐慌という意味で用いられている。英語ではいずれも commercial crisis ということになろうが、そしてここはマルクス自身のドイツ文ではないわけであるが、たとえば前掲の『ブリュメール十八日』のところで「恐慌はフランスでは工業的であったが、イギリスでは kommerziell であった」と記しているのと同じである。なおこれに似た使い方として、kommerzieller Kredit と Handelskredit とを区別して使っていることについては、筆者著『貨幣信用論研究』, 二八五ページ参照。

マルクスはさらにつづいてつぎのように記している、――「近づきつつある恐慌の性格を特徴づけるもう一つの事実を『フレンド・オブ・インディア』から引用しよう。同紙は一八五二年〔?〕のカルカッタの貿易統計を掲げてい

るが、それによると、一八五一年にカルカッタに輸入された綿製品、綿糸、紡糸の価額は四百七万四千ポンド、したがって全貿易のほとんど三分の二にのぼっていたことがわかる。今年の輸入額はもっと多くなろう。これにはボンベイ、マドラス、シンガポールはまだ含まれていない。しかし一八四七年の恐慌がインドとの貿易にかんして説明を与えてくれたので、『わがインド帝国』の輸入が全体の三分の二を占めているような工業的繁栄期の終局的結末についてはだれもいささかの疑いも挟みえない。〔上で「全貿易のほとんど三分の二」といっているが、当時のイギリスの輸出入額はそれぞれ数千万ポンドであったから、「全貿易」というのはなんであるかわからない。そして、つぎでいささかの疑いも挟みえないとしているさいの「全体の三分の二」とはイギリスの全輸出の、ということであろうから、したがってこの項全部が意味をなさないことになる。どこかのまちがいであろう〕」。

つぎ、――「現在の繁栄状態から覚醒したさいにつづいておこるべき破局の性格については以上にとどめておく。一八五三年に[16]こうした破局に突入することはいろいろな徴候がこれを示している（Auf das Hereinbrechen dieser Katastrophe im Jahre 1853 deuten mancherlei Symptome）。たとえば、イングランド銀行における金の過充（Überfülle）、およびこうした金の延べ棒のはげしい流入が生じている独特な諸事情、がそれである。目下、二一、三五三、〇〇〇ポンドがイングランド銀行に貯蔵されている。ひとは、この流入をオーストラリアとカリフォルニアとにおける金産出の増加から説明しようと試みたが、諸事実をちょっと見れば、この見解がいかに誤りであるかがわかる。[17]／イングランド銀行における金の延べ棒保有高の増加は、他の諸商品の輸入が減少したことを意味するだけである。いいかえれば、輸出が大巾に輸入を超過しているのである。／最近の貿易報告によると、事実、……ヨーロッパ大陸および英領インドのほとんどあらゆる産物の輸入はいちじるしく減少している。……増加を示しているのは亜

麻と棉花との輸入だけである。／このように輸出が輸入をこえていることは、なぜ為替相場がイギリスにとって順となっているかを明らかにしている。他方において、この輸出超過が金で決済されるということによって、多額のイギリス資本が遊休状態に置かれ、そしてこのため諸銀行の準備金が増大させられている。いまや諸銀行および個々の資本家たちは、全力を挙げてこの余分の資本を利用する可能性を探し求めている。かくして貸付可能な資本の一時的な過剰と低い利子率とが生じる。一流手形にたいする割引率は、一3/4ないし二パーセントである。しかしどんな商業史、たとえばトゥックの『物価史』のような、にもつぎのようなことが見られる、すなわち、商業上の循環において、イングランド銀行地下室中の金の延べ棒の異常な堆積、輸入にたいする輸出の超過、順な為替相場、貸付資本の過剰、低い利子率、といった諸徴候が同時に出会うと、それは規則的につぎのような局面――すなわち、繁栄が発作(Paroxysmus)に移行し、一方では過度に多くの資本が輸入に投下され、他方ではあらゆる種類の虹彩あるしゃぼん玉を伴うきわめて冒険的な投機をかならずひきおこす、そういう局面をもたらすのである。この発作の段階は破局の先駆にすぎない。この発作は繁栄の最頂点であり、それは恐慌を生み出すのではないが、しかしその勃発を誘発する」。

こうマルクスは述べ来たって、つぎのように結んでいる、――「私は、イギリスの政府筋の経済予言者たちがこうした見解を当然きわめて異端とするであろうことは、十分によく承知している。しかし、一八二五年に恐慌勃発直前において、議会開会に当って未曽有のかつゆるぎない繁栄を予言したところのかのすてきな大蔵大臣「景気屋のロビンソン(Prosperity Robinson.〔これについては後掲一八五五年一月二十五日付『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』所載の論文参照〕)このかた、これらブルジョア的楽観論者たちが恐慌を予見したりまたは予言してことがかつてあったであろうか？　どの繁栄期にも、かれらが、今度はメタルに裏面がない。今度は仮借なき運命にうち勝っていると証明する

機会をつかまえなかったことはなかった（傍点―マルクス）。しかしひとたび恐慌が勃発すると、かれらは自分には責任がないとなし、そして商工業にたいしてそれらが慎重さや見透しを十分に持っていなかったとして道徳的な憤慨や無意味な非難をもってこれに罵倒を加えるのであった」。

見られるように、マルクスは、「一八五三年」に破局に突入する「徴候」として、「イングランド銀行における金の過充」とこの金流入の事情とを挙げ、輸出超過―金流入―諸銀行の準備金の増大―利子率低下から、投機が助長され、繁栄が「発作」に入り、ついで恐慌にいたる、ということを説いている。これとほぼ同じことは、一八五〇年の第三「評論」のなかでも説かれ、そこでは「一八五二年」を予期するとともに、「過度投機が遠からず起らざるをえない徴候」として「イングランド銀行の割引率がこと二年来二パーセントより高くなっていないということ」を挙げていた（本誌前号六七―九ページ）。そのさいにも、金融市場が緩慢であるということからただちに過度投機遠からずという徴候を読み取ることはいささか気が早やすぎると記しておいたが、そのことは約二年のちに書かれたここについてもやはり同様にあてはまるといえよう。しかしまた、第三「評論」の当時にくらべてこの論文のときには、イングランド銀行の割引率はさらに下っており、一八五七年恐慌にいたるいま見ている循環期間中、この一八五二年四月―一八五三年一月の間はもっとも低かった――二パーセント――時期であったし（本誌前号六九ページ、また J. Clapham: The Bank of England, vol. II, p. 429）、またこの当時イングランド銀行の金属準備の増加はまことにいちじるしいものがあり、市場利子率もこのときがもっとも低いときであった（『資本論』, Bd. Ⅲ, S. 597 に所載の、一八五七年の「銀行条例委員会」の報告書から引用されているイングランド銀行の金属準備、市場割引率などにかんする表参照。なお、「一八四九年が暮れる前にバンク・レートは二½となった。これは一八五三年九月にいたるまでふたたび四という高さにならなかった。一八五二年

の数ヵ月間にはこれは二になった。この期間を通じて、これはノーマルに市場レートをすこし上廻り、そしてけっしてそれを下廻ることはなかった。……マネーは廉く、パンも廉く、そして一八五一年の大博覧会は平和と金との時代をもたらすべきものであった。……〔一八四九年末にカリフォルニアからの金第一号がロンドンに到着したが〕一八五二年七月頃にはイングランド銀行のブリオンはいまだかつてない額――二二、〇〇〇、〇〇〇ポンドにのぼり、そのほとんどすべては金であった」――Clapham: ibid. vol. Ⅱ, pp. 216―7.〔〔イングランド銀行の〕金買入は一八五二年にその最高に達し、一五、三〇〇、〇〇〇ポンドをこえ、うち一〇、〇〇〇、〇〇〇以上が延べ棒であった」――ibid. p. 279)。

(16) リャザノフ編書第一巻巻末の「解説と註釈」――これは通り一遍のものではないという点でなかなかすぐれたものである――では(以下〔 〕内―三宅)、「かれ〔マルクス〕はこの近づきつつある恐慌の最初の諸徴候をすでに一八五二年夏に認めえたと信じた」として、前掲の「これは恐慌が近づきつつあるのではないか?」云々という一八五二年八月十九日付エンゲルス宛のマルクスの手紙を挙げ〔しかしこれまで見てきたように、マルクスが「徴候」だと見たのはこの「一八五二年夏」が「最初」ではなかった〕、エンゲルスは「すでに一八五一年九月に近づきつつある恐慌のもはや歴然たるきざしを確認し、そしてそれ〔恐慌〕を一八五二年春に期待していたが〔「いまやきざしは歴然たるものであって」といっていた前掲の一八五一年十月十五日付の手紙を指しているのであろう〕、今度は懐疑的となっていた。繁栄についてはそれが十月か十一月までより長くつづくとは信じていなかったが、しかし革命については〔現状が〕『一八五四年までつづく』かもしれないとした〔前掲の一八五二年八月二十一日付の手紙〕」と記し、ついでつぎのように記している。「これにたいしてマルクスは、『トリビュン』でのかれの通信に見られるように、恐慌はなお一八五三年に勃発するであろうというあらたな証拠(neue Beweise)をふたたび見出したと信じた。しかしかれは、二度(zweimal)この勃発点をずらすことを余儀なくされた〔マルクスが恐慌勃発点をずらすことを余儀なくされたのは「二度」にはとどまらなかったが〕。マルクスの成功しなかった予言についてのリープクネヒトの回想はこの時代にかんするものである。『ただ〈商業恐慌〉についてはかれ〔マルクス〕は両三度(ein paarmal)予言の悪魔の犠牲となり、それにたいしてしたたかわれわれからかわれたが(wurde weidlich ausgelacht)、そのことはかれを大いに怨ませ不機嫌にさせた(was ihn ingrimmig ärgerte)』(Karl Marx zum Gedächtnis, 1896, S

31)」と（Bd. I, S. 453)。「予言」が当らなかったのはたしかであるが、しかし「からかった」だけでは意味がない。なおこの「われわれ」は当時ロンドンに亡命していたマルクスの仲間を指しているのであろう。マルクスとエンゲルスとの間では――リャザノフは『トリビュン』のこの論文当時の時点について右のように「これにたいして」と記しているが、この当時においても――たえずほとんど意見のちがいはなかったと見受けられる。

(17) 同じくリャザノフ編書第一巻巻末の「解説と註釈」では、「マルクスはこの通信においてイングランド銀行における金の過充をオーストラリアとカリフォルニアとにおける金産出の増加からではなく、輸出が輸入をこえていることから説明しようとしているが、かれはのちにおいてはその誤りを認めている。『資本論』第三巻ではつぎのように述べている」(Bd. I, S. 453)として、インスティトゥート版では S. 547（長谷部訳、青木版七一〇―一ページ）のつぎの記述を掲げている（「　」内―三宅。ここで「　」内に挿入したことは本註としてはやや傍道のことであるが、かねて疑問に思っていた箇所なので引用のついでに備忘的に記しておくこととする）。――「貨幣資本の蓄積は、たとえば一八五二年および五三年のようにオーストラリアやカリフォルニアの新金鉱による異常な金流入によって生じうる。かかる金はイングランド銀行に預託された。預金者たちはその代りに銀行券を受取り〔ここは Die Depositoren nahmen Noten dagegen, と書かれているが、意味は、預金者たちは金を預託してえた預金を銀行券で引出した、ということであろう。言葉どおりにとると、預金者は金を預託した代りに銀行券を受取った、つまり銀行券を受取ったのちにおいても同時に預金者であるような感を受けて、ややおかしいことになる〕、これをかれらはすぐまた銀行業者に預けなかった。かようにして流通手段が異常に増加した。〔リャザノフの引用では省かれているが、『資本論』ではここに「ウェゲランの証言、『銀行委員会』、一八五七年、一三二九号」とある。これは以上のところにかかるのであろう。〕イングランド銀行は割引率を二パーセントに引下げることによって、この預金（diese Depositen）を利用（verwerten）しようとした〔といっても、右のかぎりでは、すなわち金が入ってきても銀行券がイングランド銀行の外部に出てゆくかぎりでは、同行銀行部の「預金」は増加せず、また肝腎の銀行部保有銀行券――つまり銀行部の現金準備――も増大しないから、「利用」する余地がないであろう。そして、金流入にともない発券部の出す銀行券は増大するが、これが流通に入らないで――つまり流通銀行券が増加しないで――、預金債務が増加しているかぎりにおいては、「利用しよう」とすることになるであろう。実際には、巨額の金が流入し、その結果として、一部は流通銀行券の「異常」な増加がもたらされ、一部は銀行部の現金準備のこれまた「異常」な増加がもたらされた、という事態であったであろうと推測されるが、

この『資本論』の述べ方では、やや前後撞着しているように読取られるおそれがあると考えられる」。同行に堆積された金の分量は一八五三年の六ヵ月間に、二千二百万ないし二千三百万に増加した（この「一八五三年」は明らかに「一八五二年」の誤りであろう。「一八五三年」には、のちに見るように、イングランド銀行の金準備は逆に流出し、減少した」。

リャザノフはさきのように、『トリビュン』での記述はマルクスの「誤り」であって、資本論の右の記述ではこれが訂正されていると見ている。しかし、マルクスは上の『トリビュン』では、イングランド銀行の金保有高がはげしく増大しているとし、「ひとは、この流入をオーストラリアとカリフォルニアとにおける金産出の増加（Mehrproduktion）から説明しようと試みたが」これはまちがいで、他の商品の輸入減少、いいかえれば輸出超過によるものだといっているのであって、この「ひと」の「説明」がいかなるものであったのか、この点についてのマルクスの紹介はやや不十分でわからないが、「金産出の増加」によって金の「流入」が生じるとしても、この流入した金がひきつづいてイングランド銀行にとどまって金保有高の増大をもたらすとはかぎらない。たとえばこの翌一八五三年にも金産出地からの金流入は多額に上ったはずであるが、他方輸入増大等のためイングランド銀行の金保有高は減少した。したがって、マルクスが――マルクスは当時オーストラリアやカリフォルニアの金産出の増加について知らなかったわけではもちろんない――一八五二年の輸入減少をイングランド銀行金保有高増大の主要ファクターとして挙げているのは、もし事実マルクスのいうように輸入減少が大であったとすれば、そのかぎりにおいて不当なことではないであろう、と考えられる。つまり、リャザノフのいうように『トリビュン』での記述は誤りであり『資本論』では訂正されていると見るには、やや困難が感ぜられるのである。